

特別支援学校における自閉症スペクトラム障害のある児童のコミュニケーション表出指導について

妥当性のある指導を行うためのプロセスに着目して

○黒木美帆 高橋甲介

(佐賀県立金立特別支援学校) (長崎大学教育学部)

KEY WORDS: 特別支援学校、コミュニケーション表出、指導プロセス

I. 目的

自閉症スペクトラム障害(以下、ASD)の障害特性の一つとして、社会的コミュニケーションと社会的相互作用の障害があり、特別支援学校でも、自立活動に位置付けられて指導されている(文部科学省, 2012)。しかし、文脈の問題や、指導時間を十分に取ることが難しいなどの課題もある。

学校の日常の生活の流れ(ルーチン)の中でコミュニケーション機会を設定し、ASD児にコミュニケーション指導を行っている研究(小林・平澤・沖中・湯本・山久・伊佐地・脇坂・井川, 2013)があり、このような指導方法は「機会利用型指導法」(出口・山本, 1985)と呼ばれ、効果が示されている。しかし、コミュニケーションの指導機会を設定する際のコスト等が課題としてあげられている。

本実践研究では、特別支援学校の日常場面で指導機会を設定する際に、以下の3つの指導プロセスを行うことの効果について検討した。①生態学的アセスメントによる情報収集および保護者・担任らに対するニーズ調査を行う。②学校で実施しやすい文脈適合性の高い指導計画を立案するための協議を行う。③指導開始後も指導のし易さや指導の成果に対応できるよう、データに基づいた定期的な協議の機会を持つ。

II. 方法

1. 対象児童

対象児童は、X特別支援学校小学部5年(指導実施時)に在籍し、知的障害を伴うASDの診断を受けている男子児童2名(以下、A児、B児)であった。2名とも、保護者との面談などにより、一貫してコミュニケーションの表出にニーズのある児童らであった。

2. 指導期間および場面設定

A児およびB児が4年生の時(Z年10月)に直接観察を行った。その後、対象児童らが5年生の時のZ+1年6月から12月までを指導期間とした。X特別支援学校における日常のルーチンの中に指導場面を設け、第一著者及び対象児童の担任ら2名でチームを組んで指導(機会利用型指導法)を行った。

3. 手続き

A児、B児ともに、①家庭および学校場面の生態学的な情報調査及び教員と保護者のニーズの収集を行った。②それらの情報を基に、指導目標・指導内容・指導場面決定のための協議を担当らと2回を行った。③ベースライン期・指導期・フォローアップ期で構成される指導を行った。④指導期の間、チーム内でデータに基づく協議を約週1回のペースで行った。⑤保護者および担任らに社会的妥当性の調査を行った。②の協議の結果、A児の標的行動として、給食時のおかわり要求行動の表出、B児の標的行動として、教室から出る際の報告行動の表出が決定された(表1)。

III. 結果

A児とB児の標的行動の変化の結果について図1に示す。A児・B児共にベースライン期においては標的行動の生起

表1 対象児童の標的行動

A児		標的行動	
指導期I	おかわりが欲しい時に牛乳の絵カードをCTに渡すこと		
指導期II	おかわりが欲しい時に絵カードを渡すことと一緒に「おかわりをください」と言うこと		
指導期III	おかわりが欲しい時に「おかわりをください」と言うこと		
B児		標的行動	
全指導期	教室から出る際に自発的に担任の先生に接近をし、「OO(CT)先生、△△(場所)に行ってきます」と言うこと		

はみられなかったが、チームによる指導を行った結果、後半では標的行動の生起が安定してみられるようになった。指導期の定期的なデータに基づいた協議機会においては、指導手続きの修正の提案がなされた。第一著者がフェイドアウトしたフォローアップ期においても、担任らの指導行動は一部継続され、A児とB児の標的行動の生起も維持された。社会的妥当性の調査の結果、保護者と担任らの両方において高い評価が得られた。一方で、担任らとの面接の結果、将来的に行う際、実施にコストがあると考えられるポイントについての示唆も得られた。

IV. 考察

A児とB児において標的行動の安定した生起がみられ、社会的妥当性の評価も高い結果が得られた。以上のことから、本実践研究での指導プロセスは、学校の日常場面でコミュニケーション指導を行うにあたり、有効な一つのアプローチであることが示唆された。今後の課題として、面接で指摘された実施にコストがあると考えられるポイント(具体的な標的行動の決定、指導の記録の仕方、協議に使用する資料作成等)への対応や、標的行動の季節的問題が挙げられる。

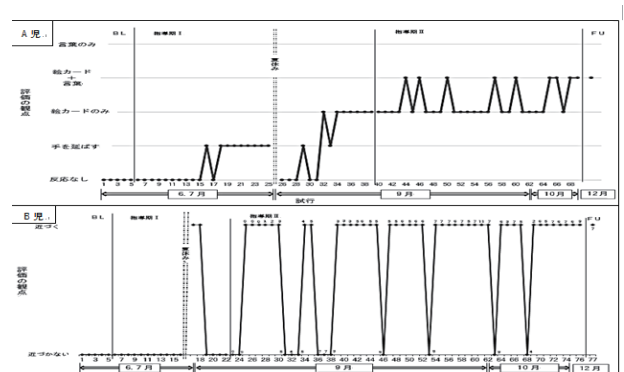


図1 それぞれの児童の指導における標的行動の変化

V. 文献

小林久範・平澤紀子・沖中紀男・湯本純子・山久利乃・伊佐地薫・脇坂悠衣・井川由佳子(2013)特別支援学校における自閉症児に対する要求言語行動の指導機会に関する検討—行動連鎖が確立した活動における教師の支援の見直しから—。特殊教育学研究, 50(5), 429-439。
 文部科学省(2012)特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編。(KUROKI Miho, TAKAHASHI Kousuke)